

## 情報系学生を対象とした福祉教育

1X-5

小林 巖 岡本 東 竹野 健夫 植竹 俊文 菅原 光政

岩手県立大学ソフトウェア情報学部

## 1. はじめに

福祉の分野における情報システムの利用は、社会的に大きな関心を集めている[1]。それは、今後わが国が迎える高齢化社会においてより高度な福祉サービスを提供するために情報技術の活用が不可欠であると考えられるからであり、他方、高齢者や障害者が情報技術を自ら活用することにより、生活の質を高めることが期待されるからである[2]。

筆者らの1人は、主に障害者福祉の分野における情報システムの活用について研究を蓄積してきた。そしてこの分野に関する情報系学生に対する福祉教育の重要性を認識し、いくつかの試みを行っている。本稿の目的は、これまでに行ってきた内容を報告することである。

## 2. 福祉情報システムに関する講義

## 2.1 概要

情報系学生を対象に、福祉分野における情報システムの活用について視覚教材を用いて講義を行う。

## 2.2 対象

岩手県立大学ソフトウェア情報学部1年生。講義を受講した学生の人数は1998年度が109名、および1999年度が125名である。

## 2.3 方法

1年生の前期に開講される「ソフトウェア情報学総論」の授業の1時間(90分)を利用した。この授業は本学部の各講座が1時間ずつ持ち回りで講義を行う形態になっている。担当時に各講座の教員が自分の講座の研究内容と関連する研究領域を紹介する形で進められる。

筆者らの担当時において、30分を福祉における情報システムの活用に関する講義に充てた。その内容は次の通りである。

- (1) 障害者、高齢者についての解説、および福祉における情報システムの活用の意義について説明(講義, 10分)

- (2) 障害者がどのようにコンピュータを利用しているかを紹介(ビデオ, 5分)

- (3) コンピュータを利用することにより、障害者の生活にどのように役立っているかを紹介(ビデオ, 5分)

- (4) 障害者の利用を想定したソフトウェアとその機能について紹介(ビデオ, 5分)

- (5) 全体のまとめ(講義, 5分)

以上の内容の講義を、1998年度および1999年度の2年間に1回ずつ行った。授業の内容に対する学生の理解の状況について確認するため、学生に対して授業後にレポートの提出を求めた(2.4参照)。

## 2.4 成果と考察

## (1) 1998年度

2.3で示した内容の授業を行い、レポートとして障害者や高齢者の生活を支援するための情報システムを1点取り上げ報告するよう求めた。表1に、提出されたレポートの内容を分野別に整理した結果を示す。表中の数値は、該当する分野について報告したレポートの数を示す。ただし、1つのレポートに複数の分野に関する報告が含まれている場合には、どちらの分野にも含めた。

表1より、視覚障害の分野に関する報告が全体の過半数を占め、この分野に対する関心の高さが伺え

表1 レポートの内容(1998年度)

分野	数	主な内容
視覚障害	50	音声出力、点字出力
肢体不自由	26	代替入力、視線入力システム
団体	10	NPO、研究団体
聴覚障害	7	手話データベース
製品技術情報	6	音声認識、福祉ロボット
災害救助システム	5	システムの紹介
ホームページ	4	福祉に関するホームページ
医療情報システム	3	介護支援システム
その他	3	授業の要点

Social Welfare Education for College Students in Information Science Course

Iwao Kobayashi, Azuma Okamoto, Takeo Takeno, Toshifumi Uetake, and Mitsumasa Sugawara

Faculty of Software and Information Science, Iwate Prefectural University, 152-52 Sugo, Takizawa, Iwate 020-0193,

Japan. E-mail: {iwano, lfo, take, uetake, sugawara}@soft.iwate-pu.ac.jp

表2 感想 (1999年度)

内 容	数
福祉情報システムの価値の理解	44
障害者にとっての意義の理解	34
この研究分野の重要性の理解	31
開発側の理解の重要性	8
障害者に対する理解	6
コミュニケーション支援の意義	3
興味がない	1

る。一方で聴覚障害に関する報告が他と比べ少ない。

他方、レポートには考察を含めるよう指示したが、結果的には情報システムの説明のみの報告が多く、福祉の分野に対する学生の意識が読み取りにくかったという点で改善の必要が推察された。

## (2) 1999年度

前年度の反省から、1999年度は昨年度とほぼ同じ形式の講義を行い、その内容に対する感想を自由記述形式で報告するよう指示した。

表2はレポートに記載された感想を、表3は学生から指摘された問題点を内容別に整理したものである。表中の数値は、該当する分野について報告したレポートの数を示す。ただし、1つのレポートに複数の分野に関する報告が含まれている場合には、どちらの分野にも含めた。

表2より、福祉情報システムの価値、障害者にとっての意義、この研究分野の重要性の理解がそれぞれ44、34、31と多く、中にはこの分野に関する製品を開発したいと述べた学生も見られた。一方、表3を見ると、この分野の研究の発展にまだ多くの問題があると学生には映ったようである。以上の結果より、この分野に対する学生の興味関心を喚起することができたと推察される。

## 3. 福祉関係施設の見学

### 3.1 概要

研究室配属の学生を対象に、福祉施設（特別養護老人ホーム）を見学した。

### 3.2 対象

筆者らの講座に配属している2年次学生のうち、福祉分野に関心のある学生3名

### 3.3 内容

盛岡市内にある福祉施設を訪問した。この施設は2年前に開設した特別養護老人ホームであり、特別

表3 指摘された問題点 (1999年度)

内 容	数
より一層の技術の発展が必要	28
様々なユーザへの対応が必要	13
ビデオで見たシステムに対する技術的なコメント	7
経済的な問題	6
誰にでも使いやすいシステムが必要	5
福祉では人の手によるケアの方が重要	3
システムに頼りすぎるのは問題	2
障害者がコンピュータを使うと余計疲れるのでは	2
情報公開の問題	1

養護老人ホームとしてのサービスの他に、ショートステイ、デイサービス、在宅介護支援センター、ホームヘルプ、身体障害者デイサービスに関しても業務を行っている。

上記のような施設のサービスについて施設職員から説明を受け、実際に設備やサービスの状況について確認させていただいた。

## 3.4 成果

設備が新しく、近所の住民が気軽に寄ることができるよう施設の状況に学生たちは興味を示したようである。一方、学生の福祉に関する蓄積や興味の対象に個別差があり、見学の焦点を絞ることに困難な印象を受けた。

## 4. おわりに

本稿では、筆者らが行ってきた情報系学生を対象とした福祉教育について報告した。

今後、本稿で述べた講義や見学に加え、筆者らの研究や福祉系の研究者とのプロジェクトに学生を参加させ、その中で体験を積んでもらいたいと考えている。

## 謝 辞

本稿の遂行に御協力いただいた学生、施設関係者の皆様に感謝いたします。また、施設の見学に際し尽力を賜った、財団法人岩手県学術研究振興財団「社会福祉援助技術の伝達方法に関する研究」スタッフに謹んで感謝いたします。

## 文 献

- [1] 岡本民夫ほか(編):福祉情報化入門. 有斐閣, 1997.
- [2] 総理府(編):平成10年度版障害者白書. 大蔵省印刷局, 1998.